

(Ⅱ) 各部会の概要

1 「学校支援地域本部」部会

◆第1回部会

期 日：平成24年6月26日（火）

会 場：大津合同庁舎 7A会議室

出席者：白石委員（部会長）、今井委員、佐敷委員、谷口委員、築山委員、松田委員、山田委員

事務局：県生涯学習課（3名）

1 開 会

- ・県生涯学習課 あいさつ

2 協 議

(1) 部会における取組

- ①平成24年度「学校支援地域本部」の概要

県内の状況について

10市町42本部、80校（小学校63校、
中学校17校）、地域コーディネーター46名

- ②平成23年度「学校支援地域本部」部会の概要

- ③平成23年度「学校支援地域本部」部会の意見

(2) 意見交換

テーマ

地域に根ざした取組にするために存続できる「無理のない組織」の活用



3 連絡事項

今後の部会の予定

- 第2回部会 内容：部会および現地視察研修

- 第3回部会 内容：今年度のまとめ

4 閉 会



◆第2回 部会

期 日：平成24年10月22日（月）

会 場：東近江市立蒲生西小学校

出席者：白石委員（部会長）、今井委員、佐敷委員、谷口委員、築山委員、松田委員、
山田委員

事務局：県生涯学習課4名

事例提供者：蒲生西小学校校長 西川 敦子氏

まちづくり協議会会長 向井 隆氏

東近江市立蒲生西小学校 地域コーディネーター 大塚 ふさ氏

1 開 会

- ・白石部会長 あいさつ

2 授業公開

- ・4年 総合的な学習の時間

「川の自然調べ」

川づくり委員会ボランティアさんが中心となり、学校に隣接している日野川に生息している生物について調べる学習を参観しました。



(「川の自然調べ」の様子)

3 協 議

①蒲生西小学校「学校支援地域本部事業」の取組について

- ・学校経営の中での本事業の位置づけ
- ・学校支援地域本部事業の取組状況について

②まちづくり協議会との連携について

- ・日々の取組について
- ・学校を核にしたコミュニティ意識の醸成
- ・地域の活性化

③地域コーディネーターの取組について

- ・学校側が求める支援活動と支援者側の意見との反映についての工夫
- ・教員との連絡調整についての工夫
- ・ボランティアバンクの作成
- ・地域支援コーディネート計画表、広報の作成
- ・教職員や地域へ支援活動を求めた後の変容

④蒲生西小学校の実践から学ぶべきこと（質疑・応答）

- ・参観を通して
- ・報告から

⑤学校支援地域本部事業を地域に根ざした取組とするために大切にしたいこと（意見等）

- ・外部団体との連携のあり方

↓

※大切にしたいキーワード → まとめ

⑥「学校支援地域本部」部会の今後のスケジュールについて（確認）

- ・3事業合同研修会 [1月24日(木)]: 県庁新館7階大会議室
- ・第3回「学校支援地域本部」部会 1月11日
- ・実践事例集のまとめ方について

◎委員の方々よりいただきました御意見等

(別紙参照)

4 閉 会

- ・閉会あいさつ



(蒲生西小学校の取組について)



◆第3回 部会

期 日：平成25年1月11日（金）

会 場：県庁北新館 5A会議室

出席者：白石委員（部会長）、今井委員、佐敷委員、谷口委員、築山委員、松田委員、
山田委員

事務局：県生涯学習課員（3名）

- 1 開会
- 2 日程説明
- 3 協議

テーマ：地域に根ざした取組にするために存続できる「無理のない組織」の活用

(1) 学校支援地域コーディネーター研修会の経過説明について

(2) 「学校支援地域本部」部会の意見概要

(3) 地域に根ざした取組事例

栗東市立栗東中学校「ブースターズクラブ」

・地域コーディネーターの確保について

(4) テーマについて意見交流

息の長い活動にしていくために

(5) 「効果的な連携のあり方について」

- 4 連絡事項

・実践事例集の編集構想について

- 5 閉会



第1回～3回「学校支援地域本部」部会の意見概要

部会テーマ：地域に根ざした取組にするために存続できる「無理のない組織」の活用

◇は、部会テーマとの関連があると考えられる内容

1. 既成団体の活用等

【まちづくり協議会の役割】

◇自治会（区長会）が中心となり、今日まで培われてきた気風を大事にしながら、行政と地域住民とのパイプ役となり、地域における課題解決のため、地域で考え解決していくまちづくりをめざしている。この地域に住んでよかったと思える地域にしたいとの願いをもとに取組を進めてきた。

◇毎年行われる「わたしの意見発表会」で、子どもたちはとても良い話をしてくれる。その内容をホールに参加した200人しか聞けないため、発表されたものを原稿にし、全戸配布（4,200戸）し、地域住民に知っていただいた。今後も、こうした積み重ねをしていく中で、お互いのものの考え方を共有していきたい。

◇あかね夏祭りでは、子どもたちが地域住民（3,500～4,000人が参加）の前で学校で学習した内容等を発表していく。その後も、伝統を受け継ぎ、自分たちの力で取り組んでいきたい。

【まちづくり協議会との連携】

◇北里小学校では、学校支援ボランティアグループが、北里学区まちづくり協議会専門部会「こどものみらい部会」の中に位置づけられて、様々な支援が行われている。各学年のそれぞれの取組に合わせて依頼する団体が決められている。

【自治会】

◇地域住民は、ほとんど自治会組織に加入している。また、自治会が教育後援会をつくり、学校としての側面的援助を行うシステムができています。

2. 学校を支える体制づくり

【地域住民の支援体制】→【地域住民の知恵に学ぶ】・【地域への愛着】

◇学校経営の中に本事業が位置づき、学校・家庭・地域が一体となり、「地域の子どもは、地域で育てる」を合い言葉として取り組んできた。「子どもによし、地域によし、大人によし。」→三方よし。

◇自治会の理解を得て、通学合宿の取組を続けてきた。（4年目を迎えた）

自治会が公民館を利用し、責任をもって通学合宿に取り組む。子どもたちが今、何を考えているのか、地域住民も知りたい。胸襟を開いて、学校側が子どもたちを地域に任す気持ちが大切である。

◇「学校支援地域本部」の取組内容

- ①学習支援活動（総合的な学習の時間、生活科、町探検、昔の暮らし、社会科、人権学習等）
- ②学校行事への参加 [田植え、稲刈り、脱穀等、親子ふれあい活動（竹とんぼづくり）]
- ③環境整備（庭木の手入れ、除草作業）、登校旗の整備
- ④登下校の安全確保
支援のキャッチ・フレーズ [だれでも、いつでも、どこでも]

【ボランティアさんの協力】

◇子どもたちが川に親しむため、中州に橋をかけたり、除草作業等に意欲的に取り組んでいただいた。

【他の取組との連携】

◇その呼びかけに成功した例（東近江市）

蒲生地区では、まちづくり協議会と川づくり委員会との連携が見られた。日野川での学習のため、ボランティアさんによる手作りの橋が造られ、川づくり委員会のスタッフとしての喜びが感じられた。

【組織】

◇コミュニティーセンターの中の組織に学校支援地域本部事業が入っている。続けていくことが大切である。

【より良い関係性】

◇人の支援があれば安心して取組を進めることができる。お互いの関係（学校と地域）を気楽に構築していきたい。人の思いでつながるより良い関係性を大切にしたい。

3. 地域コーディネーターの存在

【地域コーディネーターとしての姿勢】

◇ボランティアさんと仲良くし、依頼する時は、必ず出会うようにしている。また、ボランティアさんの思いをくみ取り、学校側に伝えるようにしている。

【ボランティアだよりの発行】

◇ボランティアさんを誘うためのボランティアだよりを地域の組単位で発行している。

【ボランティアバンクの作成】

◇ボランティアバンクに登録してもニーズが無い場合があるので、個別にお願いするようにしている。

【地域住民による子どもたちへのかかわり方】

◇地域住民の中には、通学合宿などで子どもたちにどのようにかかわっていけばよいか不安を抱きながらも、多くの人に関わっていただいた自治会が多数あった。

【校務分掌での位置づけ】

◇各学校の校務分掌の中で地域コーディネーターを誰が担当するのかによって、その後の取組方が違ったものとなる。

【地域コーディネーターと学級担任との良好な関係】

◇地域コーディネーターの席が職員室にあり、担任がいつでも相談できる関係づくりに努めている。

4. 地域で支えようとする意識づくり

【地域との関係づくり】

◇地域コーディネーターが通学合宿を担当し、自治会長さんと直接折衝することで、ネットワークづくりに努め、地域住民に自分自身の立場を御理解いただいている。

【学校ニーズの必要性】

◇まちからのボランティアニーズはたくさんあるが、学校からのニーズがないと地域コーディネーターは動けない。それらをどのようにつないでいくのかと常々考えている。

【学校としての役割】

◇学校は、明治時代から学力を育てる、社会性を身につける仕組みを担ってきた。今、学校の第3の役割として、(子どもと地域の大人を)つなぐ役割が必要である。しかし、校長や職員につなぐ役割の温度差(意識差)を感じる。

【他府県の事例】

◇岡山県の取組事例・・・学校の職員であれば誰でも地域との連携をすることができる。県内の各校で、地域連携として事務職員等が担当している。

【指導者育成】

◇高齢者が中心となり、まちづくりを考えているが、中間層（子育て段階）の指導者が育ちにくい現状が見られる。

【資金自立】

◇自分達の学校をよりよくしていくため、補助事業の終了段階を見据え、地域住民が気運を高め、補助事業に頼らない方向で、資金自立しようとする取組が見られることは、素晴らしい取組である。今後、大切なことである。

地域コーディネーターは、有償でやらないと組織がこわれてしまうのではないかと心配している。

補助金の切れ目が、取組の切れ目にならないようにしたい。教育後援会から運営資金を回すことも考えられる。

【学力支援】

◇これからの学校支援地域本部の取組として、家庭の生活基盤、学習基盤が身につけていない児童に、どのように学力支援していこうとするのか、地域として、学校として応援していくのか検討していきたい。

5. 意識の変容

【通学合宿の広がり】

◇以前、通学合宿を経験した子どもたちが成長し、ボランティア・スタッフとして参加している地域がある。

【子どもたちの変容】 → 【大きなうねり】

◇「川の自然調べ」の学習を通して、子どもたちが保護者と共に、自主的にゴミ拾いに取り組むようになった。この取組を今後も、地域での大きなうねりとして継続していきたい。

【成長】

◇PTAの役員等を経験することで、以前は自分の子どものことしか見られなかった方が、他の子のことも見られるようになり、親として成長することができたとする事例が見られた。

【事業規模】

◇今後、事業規模を縮小し、コンパクトに取り組むことも考えられる。

地域コーディネーターが、週16時間で動ける体制づくりを進めている。

【連携のあり方】

◇通学合宿では、放課後子ども教室との連携が見られる。通学合宿で、世界一受けたい授業を取り入れ、その講師を放課後子ども教室から招くため、お互い最初から一緒に取組を進めようとしているのではなく、それぞれがこれまで取組を進めてきたノウハウを蓄えてきたところで、繋がっていかうとする連携のあり方が自然である。